

東下り 其之一 口語訳・平仮名書き原文

【口語訳】

- (一)昔、男がいたそうだ。
 (二)その男は、自分を無用のものだと思いこんで、「京にはおるまい。
 (三)東国の方に住みよい国を探しに行こう。」と思って旅に行ったそうだ。
 (四)以前から友とする人を、一人二人連れて行ったそうだ。
 (五)道を知っている人もなくて、迷いながら行ったそうだ。
 (六)三河の国八橋というところに着いた。
 (七)そこを八橋と言ったのは、水の流れる川が、雲の足のようになっているので、橋を八つ渡したこ
 とによって、八橋と言うそうだ。
 (八)その沢のほとりの木の陰に下りて座って、乾飯を食べたそうだ。
 (九)その沢にかきつばたがともきれいに咲いていた。
 (一〇)それを見て、ある人が言うことには、「『かきつばた』という五文字を各句の始めに置いて旅の心
 を詠んでみて。」と言ったので、このように詠んだ。

(二)唐衣を着続けてよれよれになった褌があるので、張りながら着てきたなあ。旅をこんなふうに
 感じた。

【裏の口語訳】

(一)と詠んだので、みんなは、乾飯の上に涙を落として乾飯がふやけてしまった。

すべて歴史的仮名遣いのひらがなで書いてあります。これを流暢に音読できるように練習しましょう。

あつまくたり

むかしをとこありけりそのをとこみをえうなきものにおもひなしてきや
 うにはあらしあつまのかたにすむへきくにもとめにとてゆきけりもとより
 ともとするひとひとりふたりしてゆきけりみちしれるひとなくてまとひ
 ゆきけりみかはのくにやつはしといふところにいたりぬそこをやつはしと
 いひけるはみつゆくかはのくもてなれはしをやつわたせるによりてなむ
 やつはしといひけるそのさはのほとりのきのかけにおりゐてかれいひくひ
 けりそのさはにかきつはたいとおもしろくさきたりそれをみてあるひとの
 いはくかきつはたいといふいつもしをくのかみにすゑてたひのこころをよめ
 といひければよめるからこもきつつなれにしつましあれははるはるきぬ
 るたひをしそおもふとよめりければみなひとかれいひのうえになみたおと
 してほとひにけり